

5日間連続夜勤における疲労の発現と変動

緒方, 文子

<https://doi.org/10.15017/1866265>

出版情報 : Kyushu University, 2017, 博士 (看護学), 課程博士
バージョン :
権利関係 :



氏名	緒方 文子
論文名	Expression and fluctuation in fatigue over five consecutive night shifts (5日間連続夜勤における疲労の発現と変動)
論文調査委員	主査 九州大学 教授 加来 恒壽 副査 九州大学 教授 中尾 久子 副査 九州大学 教授 橋口 暢子

論文審査の結果の要旨

論文題名は「Expression and fluctuation in fatigue over five consecutive night shifts」である。本研究の目的は夜勤による疲労は、日周性疲労を通り越して即座に慢性化しやすいことから、連続夜勤者の日周性疲労の程度と変動、慢性疲労に影響する要因を明らかにすることである。方法は、5日間連続夜勤を5日間連続日勤と週替わりで行う製造業に従事する男性94名に対して、夜勤時と日勤時の日周性疲労及び慢性疲労に関する質問紙調査を行なった。

最終的に5日間の連続夜勤と連続日勤を行なった38名の分析対象とした。対象者の平均年齢は27.8歳、勤務期間は63.1ヶ月であった。夜勤と日勤における日周性疲労の得点で比較すると、休み明けの勤務前は日勤の得点が高く、勤務後では全ての日の夜勤の得点が高かった。特にねむけ感では、全ての日で有意差がみられた。変動は、夜勤と日勤ではほぼ同様に推移した。慢性疲労が高いと判断された22名は、低い者より日周性疲労の得点が低く、特に夜勤の得点が有意に低かった。

以上のことより、夜勤に慣れがある対象であっても、夜勤時の方が疲労すること、しかし慢性疲労が高い者は、特に夜勤時の疲労に対して無自覚になっている可能性が示された。夜勤・交代制勤務者への保健指導や職場環境改善の目安、労災防止のための注意喚起の際に必要と考えられる。

本研究は、連続夜勤における日周性疲労と慢性疲労の現状を明らかにし、夜勤・交代制勤務者への保健指導や職場環境改善に結びつく臨床的にも意義のある研究と考えられる。審査においては調査委員が行なった質問にも適切な回答が得られており、調査委員の合議の結果、本論文は博士(看護学)の学位に値するものと認める。